

酒仙供養

高木, 市之助

<https://doi.org/10.15017/2332987>

出版情報 : 文學研究. 36, pp.15-29, 1948-03-30. 九州文學會
バージョン :
権利関係 :

酒仙供養

高木市之助

小野島さんの追悼の爲に私がこの「文學研究」に筆を執るなどとは私の夢想しなかつた事であるばかりか、當の小野島さんも亦夢にも考へなかつた事である。小野島さんはよく、「高木さんの停年記念號には必ず書く」といつてその構想まで聞かして下すつた。さういふ場合小野島さんはきまつて、例の酒仙らしく、少々ろれつがまはらなくなつてゐたし、私もきつと好い氣持になつてゐた。そのせいか、私にはその言葉がたまらなくありがたく、忝く、もう既に何か書いて頂いてしまつたやうな錯覺を起しつゝ、くりかへしその好意を謝したものである。

などといふと誠にたゞいもない話に聞えるが、今このやうに、當時夢想だにしなかつた逆縁が生じて、私が小野島さんの爲に書くといふかなしくも亦光榮ある立場に立つて、さてどのやうにしてこの酒仙を供養しようかと考へると、やつぱりそれは酒に係る何かでなければならぬ氣がする。試みに萬代か、富の壽か、生の一本を恭しく靈前に供へたなら、それを佛は梵爾として眼前に彷彿するであらう。さうして又例の通り「高木さん、逆になつちやいましたね、あゝ逆にね」とか何とか話しかけて下さる筈である。併し不幸にして闇のルートを有たぬ私にはさうした供養反魂のすべが無い。そこで不本意ながら代へるに一聯の萬葉酒を以てし、私なりに供養のまごころを捧げる譯

である。萬葉に酒を求めるものは、誰でも先づ大伴旅人卿の讚酒歌十三首（萬葉集卷三收、三三八―三五〇）に想到するであらう。十三首はよく言はれるやうに、ばら／＼に解體することの出来ない一連作とも見られるし、別に私意を交へないでそのまゝそつくり故人に供へたいといふ意味もあつて、こゝにその全貌を列ねることを許して貰いたい。

大伴卿讚酒歌

- しるしなきものをおもはずはひとつきのにされる酒をのむべくあるらし 1
 酒の名をひじりとおほせしいにしへのおほきひじりのことよろしさ 2
 いにしへの七のさかしき人たちもほりするものは酒にしあるらし 3
 さかしみものいふよりは酒のみてゑひなきするしまさりてあるらし 4
 いはむすべせむすべしらにきはまりてたふときものは酒にしあるらし 5
 なか／＼に人とあらずはさかつぼになりてしがも酒にしみなむ 6
 あなみにくさかしらをすと酒のまぬ人をよくみれば猿にかもなる 7
 あたひなきたからといふとも一つき（坏）のにされるさけにあにまさらめや 8
 よるひかる玉といふとも酒のみてこゝろをやるにあにしかめやも 9
 世のなかのあそびのみちにすゞ（冷）しきはゑひなきするにあるべくあるらし 10
 いまの世にたぬしくあらば來むよにはむしにもとりにもわれはなりなむ 11

うまるればつひにもしぬるものにあればこのよなるまはたぬしくをあらな 12

もだをりて（默然）さかしらするは酒のみて多ひなきするになほしかずけり 13

誠に萬葉集中の一偉觀である。さうして諸註がよく言及してゐるやうに、作者の性格を窺ふ上に不可欠の好資料であり、この一連の解釋如何によつて大宰帥大伴卿は老莊にかぶれた竹林七賢の思想の持ち主ともなり、或はさうでなく、亡妻をおもひ出しては酒に鬱を遣る一懷郷病者ともなるであらう。併し私は今こゝでこの興味ある問題に滞らうとは思はない。酒仙を供養するためにもつと興味ある問題が私を待つてゐるからである。十三首は正に酒を讃める歌である。十三首の主題が酒であることにまちがひはないが、しかし同時にこのやうな主題を契機として作られたものが歌、即ち一個の文藝である事もまちがひはないであらう。そこで私にはこの二つの事實を結びつけて、旅人の酒觀から、同じ彼の詩觀を窺ふ途がありさうに想はれてならないのである。それが今採りあげてみたいこの小稿の問題である。由來酒仙は往々にして詩仙である。それは私達が一番身近に供養の主人公である、小野島さんに感得したことであるが、旅人卿も亦恐らくこの部類に屬する仙であつて、隨つて彼がこのやうに讃めてゐる酒は、その實彼の詩を生み出す酵母であり、もつと言へば、彼がこの十三首で酒を讃めてゐるといふ事は、事實酒を象徴として彼の詩を主張してゐるといふ事とさうちがつてはゐないであらう。例へば赤人が田子浦で富岳を詠じた場合、富岳は赤人にとつて彼の文藝を生み出す契機であり、隨つて又彼によつて創造された富岳のすがたは彼の詩觀の何よりの象徴であるやうに、酒仙にして詩仙である旅人にとつては、そこに創造されてゐる酒のすがたはそのまゝ彼の詩觀を象徴してゐると

觀られなくてはなからう。陶潜は大陸に於ける詩酒仙の最高峯であらうが、彼の飲酒二十一首を讀んでみると、彼の酒への主張は同時に又彼の詩の主張であることを教へられる。しかも旅人の讃酒歌を之に比べてみると、そこにははつきり、陶の酒ではない、旅人自身の酒があり、そこから又私達は旅人の最も旅人らしい詩觀、或は汎く文藝論を窺ひ得るであらう。

たゞ併し私は今このやうな觀點に立つて、抽象的な一篇の文藝論を草してゐるのではない。それは多分「さかしみと物言ふ」に近い論議として當の旅人をしてそつぽを向かせるに過ぎないであらうし、供養の主の靈を慰める所以でもなさうである。そのやうな抽象的思辨をぬきにして、もつと直接に詩酒の正體について語りたいのが私の念願である。ところが幸にして當時、一人の否酒仙型の歌人が居た。彼は詩人らしく、抽象的な文藝論に據る事なく直ちにその創作によつて、旅人のこの酒仙型詩論に抗議してゐる——かに見られる。だからもし私が彼のこのやうな抗議に便乗して供養の筆を進めるなら、私も亦晦澁な論議に互る事なくして、よく旅人の詩酒論を窺ひ得るのではなからうかと思ひついたのである。

彼とは山上憶良の事である。旅人と憶良との關係については、今まで屢々考へた事があるので註1、さうして故人も亦それを讀んで下すつたと想像されるので、又こゝにくりかへすのもどうかと思はれるけれども、一體旅人と憶良との關係は、管見に隨へば、常に相互に反撥しつゝ、相互の藝術を伸して行つたといふ誠に面白い關係にある。旅人が大宰帥であり、憶良がその部下として筑前守であり、兩者の間には頻りに歌の贈答があり、旅人の歸京後憶良も亦京へ歸つた等々の事實から二人の詩の關聯を想像し、彼等が單に相互の詩のよき理解者、同情者であつたと考へる事

は、二人の作歌を少し立入つて考へる場合どうしても許されない事である。私は二人の作歌の幾對かを比較對照する事によつて之を證する事が出来ると思ふが、それは前述のやうに既に色々の機會に發表したこともあるから、こゝにはさうした手續を省略して結果だけをくりかへしたのである。つまり、二人の詩觀はその作品がさうであるやうに、相互にその傾向性格を逆にしてゐた。私交は兎も角、文藝の立場に於ては、この點正に對立反撥して止まないものがあつたのである。さすがに旅人は憶良に對する長官としての立場から、又彼の溫柔淡雅な性格から、必ずしも露骨な態度を示しはしなかつたが、憶良の方は、故意に又無遠慮に、さうしてもしも萬葉集卷五所收の彼の作歌に添つて行くなら、殆ど一作毎にといつてもたいした言ひすぎではないほどに旅人に反撥し抗議しつゞけてゐる。さうして兩者のこのやうな對立こそは、實はこのやうに相互に特徴のある作品を生ましめ、相互に独自の詩人たらしめた、最も幸福な推進力だつた。と私は見てゐる。

ところが憶良は旅人の讃酒歌に對しても、むしろ誠に堂々とその作歌によつて抗議することを忘れなかつたやうである。有名な「子等を思ふ歌一首並に序」(卷五―八〇二・八〇三)がそれである。

瓜食めば 子どもおもほゆ 栗食めば ましてしぬばゆ いくより 來りしものぞ
まなかひに もとなかゝりて やすいしなさぬ

反 歌

しろがねも 金も玉もなにせむにまされるたから子にしかめやも

(本歌には稍長文の序が添へられてゐるが便宜省略に従つた)

尤も讃酒歌もこの「子等を思ふ歌」も、創作時期が不明の爲に、どちらが先に作られたかといふ點を斷定することは不可能であるが、私は他の諸例から考へて、旅人の讃酒歌が先づ成り、憶良が之に反撥して「子等をおもふ歌」を作つたものと、姑く假定してゐる。併しこの關係は逆に憶良の作に對して旅人が皮肉を混へて十三首を作つたとも考へ得るもので、いづれにしても私の見解を覆す事にはならないであらう。先後はともかく、兩者が決して無關係交渉に出來たのでない事は明白である。證としては旅人の讃酒歌の8と9とを憶良の反歌に比べてみれば十分であらう。即ち旅人の兩歌の構想は、要するに、酒又は酒の境地を寶玉に比較して、どのやうな無價の寶珠、夜光の珠であつても、一杯(原歌は杯)の濁酒乃至それによつて鬱情を散するに若くものはないと酒を讃嘆したのであるが、憶良の作も亦子の愛を同じやうに金銀珠玉に比較してゐるのであつて、しかもこの憶良の歌の下句「まされる寶子にしがめやも」は旅人の8の「あにまさらめや」とりの「あにしかめやも」の合成である。「構想が類似してゐて、その上類句が求められるといふこの事實は、多少共古典和歌の研究に經驗のある者には、偶然の一致として見のがす事の出來ない意識的踏襲としか解せられない事であらう。つまり憶良は旅人の酒の禮讃を子のそれによつて反駁してゐるのである。試みに多少の補足を試み、その意を忖度するなら、

貴方は一にも酒、二にも酒とおつしやる。價なき玉、夜光る玉を以てしても、酒に「まさらめや」酒飲む氣持に「しかめやも」とある。貴方のその二首に對して私はことさらに抗議して

しろがねも黄金も玉もなにせむに、「まされる」だから子に「しかめやも」と二首の構想を意識的に且つ正直に

頂き、下句は同じやうに、二首の成句をわざと踏んで、酒を手に置き換へてみました。歌といふものは凡そこのやうなものでなければならぬと私には考へられます。いかゞでせう。

といふ意味のことを、彼自身の創作によつて呼びかけてゐるのであらう。この外にも證とする節がないでもないが、煩瑣に亘るから一切を割愛することにしよう。

一體憶良は酒のよきお相手でないばかりか、むしろその仇敵ですらあつた。この點「酒仙」の對蹠的存在として優に旅人に反抗するに足つた譯である。故意か偶然か、萬葉集は、旅人の讃酒の直前に憶良の罷宴歌一首を配してゐる。

憶良等はいまはまからむ子なくらむそもその母も吾を待つらむぞ、（山田孝雄氏の訓による）

尤も此の歌で彼が拒むものは、直接には酒ではなくて宴である。併し宴とはこの場合、酒の一つの場であり、一つの世界に外ならぬ。彼に唾棄されてゐる「宴」とはこの意味に於て、畢竟酒のまたの名であらう。逆に彼が本歌で憧憬してゐるものは、或はこのやうな彼を、彼の家庭に待つてゐた者は彼の愛妻であつたと一應言へなくはないが、しかもこの歌の表現を正直に受け取るならば、愛妻は彼にとつて妻ではなくて、その實「子の母」でしかない。そこにやつぱり、「子」を中心とした彼の人世觀なり詩觀なりがのぞいてゐる。随つてこの歌は、さきの「子等を思ふ歌」と全然同一の立場に立つて、酒を貶し子を讃しつゝ直後に續く讃酒歌に抗してゐる事になるのである。

私は決して、憶良の肩をもつて酒仙を攻撃しようとしてゐるのではない。唯憶良とこのやうな果しあひを通し、酒仙の酒觀乃至詩觀の本質を一舉に見極めたいと念願するばかりである。憶良の方法に随つて、更に彼の主張を

押し進めるならば、彼は恐らくその「子等を思ふ歌」によつて、旅人が酒に與へたすべての價値を剝奪して「子」に與へようとしてゐるのであらう。「子」こそは「酒」に代つて「きはまりてたふときもの」でなければならぬ。「酒」の絶對性を否認する事は彼に於てその同じ絶對性を「子」に肯定する事ではなからなかつた。さうして旅人の酒觀がそのまゝ彼の詩觀に連なるならば、憶良の子等を思ふ心も亦そのまゝ彼の詩觀の核心でなければならぬ。かういふ風にと考へると、私達は憶良の抗議の内容を明かにする爲に、彼の武器である「子」についても少し考へなければならぬ。萬葉集卷五を中心とする憶良の作品中に「子」を求めることはそんなに困難ではない。例へば「男子名は古目を戀ふる歌三首」(卷五—九〇四、九〇五、九〇六)は「子等を思ふ歌」より大作であり、且つ觀方によつては力作であり、同時に「子」を主題とする最も憶良らしい作である。又老身重病年を経て辛苦す、及兒等を思ふ歌七首(卷五—八九七、八九八、八九九、九〇〇、九〇一、九〇二、九〇三)にしても、森本治吉氏が評してゐるやうに「燃焼不足の歌」ではあるが、「子等」が主題になつてゐる點で彼の「子」に就て知るためには役立つ歌である。彼が古目の歌で子の夭折を嘆きつゝ、長歌の結びに「手に持てる、吾が兒飛しつ世の中の道」と吐き出すやうに言つてゐる一句は「子」が彼にとつて凡そどのやうな價値の表象であるかといふ事をかなり雄辯に語つてゐる。この長歌によれば古日は彼にとつて「七種の寶」以上の寶である事に於て「白がねも黄金も玉も」とうたはれた「子等を思ふ歌」の主人公と同様であるが、その死は「手に持てる我が兒飛ばしつ」といふこの力強い一句がいみじくも表現し得てゐるやうに、夢幻浪漫の花ではなくて、それは「世の中の道」即ち現實地上の生活に於て、たとへば皮の財布でも強奪されたやうな實質的な事件として嘆かれてゐるのである。

反 歌

稚ければ道行き知らじ幣はたけはせむ黄泉よみの使負ひて通らせ

布施ほせ置きて吾は乞ひ禱いのちむあさむかず直ただにい行きて天路知らしめ

こゝにも彼の「子」の彼らしい價値がまことにあさやかに打出されてゐる。彼の最愛の兒は今しも兩親の悲傷を一身に負うて、とぼく／＼とこの世を辭し去るのであるが、それにしても、この兒の姿は來迎圖にでも描かれさうな纏滲とあえかなものではなく、むしろそれとはうらうへに、いかにも實質的な地上現實の相を持ち越してゐる。黄泉の使に、そつと布施を握らせて、負はせようとする彼の愛兒に彼岸的なまぼろしを求めることが、いかに無理であり、それだけ又、このいたいけな彼の「子」がその死後に於てもなほ何といふ實質的現世的な價値を以て慟哭されてゐるとか。

すべもなく苦しくあれば出で走り去ななと思へど兒等に障さやりぬ。

水沫なすもろき命もたくなはの千尋にもがとねがひ暮しつ。

これは前掲老身重病云々の端書を有つ歌の反歌であるが、同じ思想は、長歌の中にも

月かさね うれひさまよひ ことごとは 死ななと思へど さばへなす さわぐ兒どもを 棄うてては 死には知

らず 見つつあれば 心は燃えぬ 云々

とうたはれてゐるのであつて、歌の主人公は老身重病故に現世を厭離して死を思ふこと切なるものがあるにも係らず、しかも一面之を斷念して、もろき命の千尋に續く事を願はずにゐられない所以のものは、一つに兒等に對する愛

着に拘るのである。つまり彼は彼の生の一切を「子」に賭けてゐる。「瓜はめば——栗はめば——」といふ、「子等を思ふ歌」の冒頭の誠に印象的な表現にしても（一部の註者が指摘してゐるやうに、陶詩の「責子」の影響を認める事に私も亦異議はないけれども）同時に、いかにも實質的な、又現世的な彼の「子」の價值はこゝにも誠に新鮮な味を以て描き出されてゐることを見逃す譯にはゆくまい。要するに、彼は旅人の讃酒歌に對して、およそこのやうな「子」を以て抗議し反撥してゐるのであつて、この事は即ち、彼の抗議の内容が何であるか、彼が酒の何を拒まうとしてゐるかといふ點をはつきり示してくれてゐるものと言へよう。

齊しく金銀珠玉にも優つてたふといとは言つても、そのたふとさに於て「子」と「酒」とでは方向が正反對である。酒の價值はむしろ天上界に屬する何ものかであり、その縹渺たる性質の故に存する或るものである。憶良が酒に對して反撥するのも、畢竟酒がこのやうに本來地上の物象を無視し、天上高く人の魂を昂揚飛翔せしめようとする性格、乃至明哲な理知の世界を押し除け、陶然たる情感のおもむくまゝに搖蕩しようとする志向に對してである。人は一步一步しつかり大地を踏みしめて歩かなければならぬ。そこに人の尊さがあり、人生の生き甲斐がある。さうしてこの價值をうたふところに歌即ち文藝の世界がある。——と憶良は主張するのである。この主張は彼の他の作品からも歸納し得る事で、例へば萬葉集中「子等を思ふ歌」に先行する「惑へる情を反さしむる歌一首」は彼が異俗先生と假稱する人物を設けて、（そのかげにどのやうな實在の人物がゐたかといふことも私には問題であるが）、之を教誡するといふ趣向であるが、吾々は本歌にも憶良の同じ主張を聴くことが出来るのであつて、その長歌で彼が、

天ならば 汝がまに〜 地ならば おほきみいます

といひ、又反歌で、

ひさかたの天道は遠しなほ、家に歸りて業をしまさに

とうたつてゐるのは、この主張乃至その延長に外ならぬであらう。さうしてこのやうな主張を身を以て價值づけてゐるのが彼の「子」なのである。

さて私はこの邊で、肯て矛をさかしまにしなければならぬが、憶良をしてこのやうに執拗に反撥せしめてゐる旅人の「酒」乃至「酒」によつて象徴せられる文藝意識は、考へてみれば、實は逆に、その故にこそ、憶良の「子」乃至「子」によつて象徴せられる文藝意識に對する反撥でなければならぬ。具體的に言へば、憶良の主張する「子」も亦、必ずしも主張者自身が信ずるやうな、絶對普遍な價値の持ち主ではあり得ないであらう。この事は、前出、憶良の數々の作品そのものが實證してゐると言へなくはない。例へば「子等を思ふ歌」で憶良が旅人に抗議することに成功したといふことは必ずしも彼がこの歌で「子」の絶對普遍な文藝的價値を創造し得たことになるとは限らないのである。換言すれば、この歌の「子」はよく讚酒歌の「酒」を批判し得てゐるかも知れないが、そのことは必ずしも彼の「子」が批判され得ないほどに完璧であることを證してはゐない。それどころか却つて、「子の「酒」に對する批判の中には、既に「子」の有つ限界性を孕んでゐる筈であり、さうしてこのやうにして、もし「子」が「酒」を批判し得るその可能性の中に、既に「子」が批判されることの可能性が胚胎してゐるとするならば、このやうに「子」を批判し得る可能性は何よりもまづ、「子」によつて批判された「酒」の中にこそ求められなければならないのではないか。この消息をもつと明かにする爲に、私は再び前出古日の歌の反歌「わかければ」を採りあげてみたい。亡兒

の死を慟哭する父が、賄ひを使つて泉路の安全を企てるといふ詩境には確かに地上現實の或る確かさがある。そこには彼の詩の強味があり、彼の「子」の迫力がある。併し同時にそこに、彼の「子」の或は彼の詩の、一方の限界がのぞいてはゐないか。換言すれば人は或は詩は、そのやうにいつも地上にへばり附いて居なければならぬものであるかどうか。人の子の死は、少くとも詩に於けるそれは、常にそのやうに深刻な現實の境に於て、醜惡な世情と共に呻吟されなければならぬかどうか。人が一應その地上性を否定し、その現實性を拂拭して、憶良の謂ゆる遠い天路にその魂を淨化させるといふことがなせ、少くとも詩の世界に於て、その意義價值として許されないか。——といふ疑惑乃至逆の抗議は、憶良の作品に於ける「子」の境を一巡して來た者の心には、多分當然といつても差支ないほど自然に浮んで來るのではなからうか。私は今酒仙供養の爲の私情から物を言つてゐるのではない。遠い天路を棄て、地上に歸らうとするのが人間の一つの本性であるならば、逆に身近な地上を棄てて青空のたなびく極みにあこがれようとするのも亦人間の他の本性である。旅人が「酒のまぬ人」を凝視して「猿にかも似る」と嘖笑してゐるのは、實はこのやうな人間の本性に基づくもので、必ずしも憶良が「天ならば汝がまに／＼」とつき放すやうに言つてゐる人性のよそごとではないのである。旅人はよく、酒を讃める爲にさかしらの醜さを言ふが、人の心が空を行く天馬の翼を收めて足兼地上に引きずり始めた時、そこに謂はば砂ぼこりのやうにうすぎたなくたちこめるもの、それがさかしらでは無からうか。憶良の「子」には、さすがにそのやうなうす汚なさは無いとしても、彼が例へば「布施置きて」「黄泉の使」に「乞ひ禱む」姿を、酒仙の立つ仙境から見下ろしたなら、それは矢張、「もだ居りてさかしら」といふ或る卑しさに見えたのではなからうか。——といふ意味に於て、旅人の「酒」を通して、憶良の主張する「子」

乃至はそれによつて象徴される彼の詩觀の限界が示唆されてゐる。所詮は、酒を拒む者は同時に酒によつて拒まれてゐるのであり、さうしてこのやうに「子」が「酒」を拒むところに憶良の主張が求められるやうに、「子」が酒によつて拒まれるところにこそ、旅人の——或は一般に酒仙型詩仙の詩觀が求められるのである。何だ、そんな事なら今更こと新しく並べたててには及ばない、一般文藝論史上の藝術主義對人生主義論議の極めて素樸な一例證に過ぎないではないか。——言つてしまへば全くそれだけのことであらう。併しそれにしても、此の二人が萬葉の世界に於て、どこまでも詩人の立場を堅持しつゝ、實踐詩作の刃を閃かしつゝ相闘ふ姿は、少くとも日本文學史上の一つの見ものではなからうか。

私の萬葉酒はあまりにも供養の名に遠ざかつて行つたやうである。併し省みれば、このやうに文藝論に係る以外、私に何を供養する資格があらう。このことは誰よりも小野島さん自身がよく知つてゐて下さることである。故人は甘んじて私のこの非禮を受けてゐて下さるにちがひない。そこで最後に、「酒」と「子」のこのやうなそれらの限界を越えたところに、何かしら普遍妥當な、一層高次の統一點が豫想され、さうしてそれこそ文藝の有つ絶對究竟の境地ではないかと、いふ問題がある。例へば、酒仙小野島さんは人一倍子煩悩であつた。私達の思ひ出す面影はよくあのかはいらしい愛嬢を伴なつてゐる。いさゝか樂屋落ちになるが、大きなリユツクサツクを背負つて帝大前停留所に立つ故人の傍にちよこなんと寄り添ふ愛嬢——このほゝえましい好風景の背後に私達は故人の一人倍濃やかな親心を感じたものである。私の經驗によれば、これは實は小野島さんに限つたことではなく、酒仙は往々にして子煩悩である。さうしてこの事實は、世上に於て、人がよくこの種の矛盾を自然に剝服統一し得てゐることを示すもの

であらうが、例へばこのやうな統一を文藝の世界に求めることは出来ないものかといふことなのである。それは勿論直ちに文藝の本質論に連なる問題で、このやうな小稿の企て及ぶところではない。唯ことの序を以て、謂はば余説として、私はこの問題をおよそ次のやうに考へてゐることを附け加へて筆を擱くことにしたい。

文藝は人間に於ける一つの創造である。その限りこのやうに相反する人間性がその限界を超えて、一層高い次元に於て統一されるといふ事は、この創造過程の中にも當然要求期待される事である。と一應考へられるであらう。それは少くとも文藝に奉仕する文藝學の理想であり祈願でなければならぬ。併しながら、斯くありたい期待や念願が、かくある、更にきびしくはかくあらざるを得ない現實と混同してならないことは文藝學的思惟に於ても當然である。私には文藝に於ける創造が他のどのやうな創造（例へば宗教、哲學、政治、經濟等々）よりも一層人間的な、隨つて又一層全面的な創造であることを信する者であるが、それにも係らず、文藝は、それが文藝でなければならぬその現實を逸脱し得ない限りに於て、上述のやうな期待乃至念願を果す事をその創造過程の中に斷念しなければならぬ宿命を負うてゐるのである。なぜなら、管見に隨へば、文藝の特に文藝的な創造とは、眞實な自己の表現によつて、或は表現によつてのみ人間そのものの表現へ迫る事であり、この意味に於て、自己と對立する他人は自己との關係換言すれば對立といふことに於てのみその創造に參與し得るのであつて、自他の他の關係、例へば兩者の統一といふやうな事は文藝的創造が少くともその現實に於て關知し得ない所である。具體的に言へば、旅人の讃酒歌は憶良の「子等を思ふ歌」と共に、彼等によつて制作された二枚の自畫像である。彼等が、酒とか子とか、彼等独自の色彩を驅使することによつてその畫布の上にそれ／＼の自己をうち出して行く過程、それがそのまま彼等の文藝に於ける最も文藝的な創造過

程なのである。併しながら吾々は、同時に又、彼等の文藝的創造の現實の限界も亦そこにあることを知らなければならぬ。創造とは文藝の現實に於て、略々それだけの事であつて、それ以外或は以上のどのやうな事でもないからである。たとへば彼等が一枚の畫を一枚にまとめるといふ事が肖像畫製作のよそごとであるやうに、旅人の眞實は自己と、之と對立する憶良の同じやうに眞實な自己とがその對立を超えて、一人の人間にまで統一されるといふやうな創造過程は文藝の不可能事である。

尤も文藝的創造に於けるこのやうな不可能事は、他の創造に於て必ずしも同様ではないであらう。吾々は勿論そこに哲學的な思索者として、或は宗教的な信者として、乃至政治的な統治者としての旅人憶良を豫想されない筈はなく、そのやうな豫想の下には、この不可能事も亦、哲學的宗教的乃至政治的創造として可能事であつたかも知れないのである。それは、前述の如く、現に世上の人間が是等の矛盾を克服して頗る自然に吾等の前に立つてゐるといふ經驗からも示唆されてゐることであらう。それは又文藝自身にとつても、文藝が人間創造の一役を買つてゐることを自覺してゐる以上、恐らくは不斷に期待し念願する一つの志向であらう。唯併しそのやうな期待や念願にも係らず、文藝はその現實に於て日々夜々例へば旅人のやうに酒をほむる歌によつて自畫像を描き出すに余念がない、たゞそれだけである。それが、旅人の言葉を借りるなら、「酔ひ泣きする」にも似た、文藝のかなしくも美しい創造過程でもあらうか。酒仙以て瞑すべしといつたら、地下の故人は果して首肯して下さるかどうか。

